

(1) 科目の紹介

科目名	環境科学特別講義 C	開講年度：2012 開講学期：前期 曜日校時：月 4 単位数：1	専門 講義 選択
教員名（所属）	深見聡(水産・環境科学総合研究科)		
対象学部・年次	環境科学部・全学年	受講人数：182名	
授業のねらい	<p>「環境」に係る諸分野において学外で活躍している方々を講師に迎え、環境科学の普遍性と多様性を知り、具体的な活動の場面で求められるアプローチ手法を学ぶ。</p> <p>なお、本科目は「環境科学特別講義 D」および「地域技術論」の2科目と連動している。とくに本科目の受講生は、環境科学特別講義 D も連続して受講することをお勧めする。</p>		
授業の方法	学外からの招聘講師(3名)と担当教員によるオムニバス形式。		
おもなアクティブラーニング手法	<p>毎回学生にレスポンスシートを配布し、講義時間の終盤 15 分間を使って、特定の課題を課したり、講義内容の感想や質問を記入したりしてもらった。特に時事的な問題を扱うため新聞記事を資料として配布し、NIE を意識した展開を図った。それらの内容のうち、代表的な感想や質問については次回講義の冒頭で必ず回答するように努め、必要に応じて補足資料の配布等でフィードバックの機会に努めた。また、ゲスト講師にも、この点を徹底していただくよう事前打ち合わせを重ねた。</p>		

(2) 学修評価について

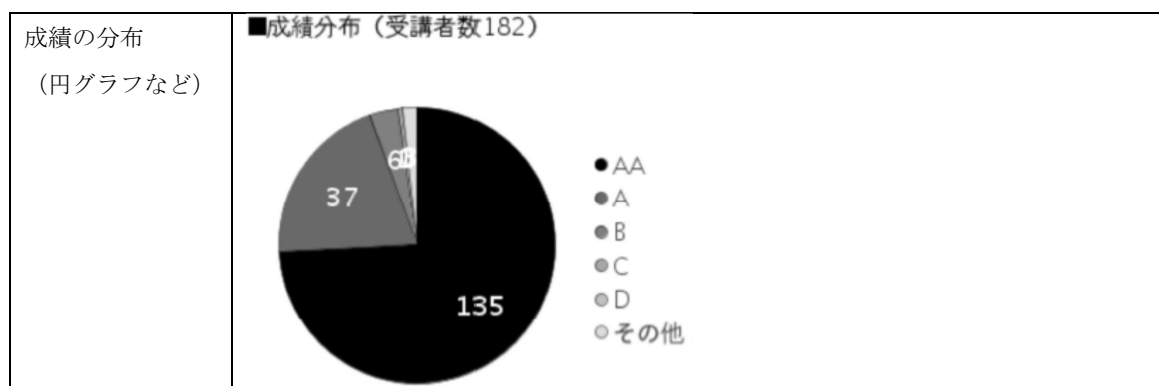
到達目標	<p>環境問題への具体的な取り組みを聞き理解することをおして、単にそれらを事例や知識にとどめるのではなく、環境科学のもつ普遍性と多様性を知る契機となるようにする。そして、「環境」を主体的にとらえ、みずからの考えをもてるようになることを目標とする。</p>
成績評価の方法	各回のレスポンスシートの内容(50%)および期末試験(50%)により評価する。

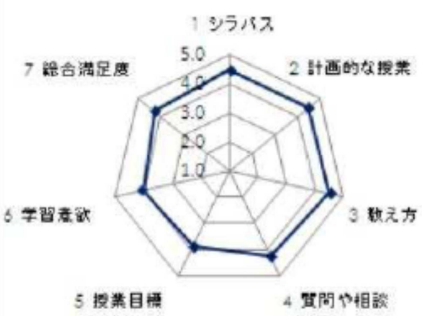
(3) 授業進行の概要と詳細

授業進行の概要	
---------	--

回	学習内容	授業方法	予復習課題
1	オリエンテーション(深見)	本講義の概観 (プリント、 パワーポイント)	予) ----- 復)
2	環境問題をフィールドで考える(1)(深見)	講義 (新聞記事、 パワーポイント)	予) 環境問題に係る新聞記事を 切り抜き持参。 ----- 復) 配布した新聞記事の熟読。
3	さいかい元気村の挑戦 北島淳朗氏(地域づくりファシリテーター)	講義 (パンフレット、 パワーポイント)	予) さいかい元気村とは何かを 調べてくる。 ----- 復) エコツーリズムとは何かを 整理する。
4	環境問題をフィールドで考える(2)(深見)	講義 (新聞記事、 パワーポイント)	予) エコツーリズムの実態につ いて調べてくる。 ----- 復) 配布した新聞記事の熟読 と、環境問題におけるガバ ナンスのあり方を考える。
5	島原半島ジオパークの取り組み 江越美香氏(島原市役所)	講義 (新聞記事、 パワーポイント)	予) 新入生合宿でなされた島原 半島ジオパークの説明を再 度思いだし整理する。 ----- 復) 配布した新聞記事の熟読。
6	雲仙 E キャンレッジプログラムとは(深見)	講義(プリント、 DVD、パワーポイ ント)	予) 新入生合宿でなされた雲仙 E キャンレッジの説明を再 度思いだし整理する。 ----- 復) 大学と地域の連携における 利点と課題について考える。
7	長崎県庁の環境への取り組み 赤木聡氏(長崎県環境部未来環境推進課長)	講義 (パワーポイント)	予) 自治体の環境行政に関する 新聞記事を読む。 ----- 復) 自治体の環境行政の課題に ついてパワーポイント資料 から考える。
8	期末試験		予) ----- 復)

(4) 授業の成果



<p>学生の授業評価 (レーダーチャートなど)</p>	<p>■期末の授業評価</p> 
<p>全体の振り返り</p>	<p>受講者数が180名を超える人数であったため、受講生の感想や要望等を毎回「出席表&感想等記入用紙」を配布しそれらの把握に努めた。次回講義の冒頭で、代表的な質問への回答をおこなうなど、可能な限り受講生と講義担当者との意思疎通の機会確保を図った。</p> <p>毎回のレスポンスカードの内容50点、期末試験50点で評価をおこなった。いずれも、自らの考えや講義内容を簡潔にまとめる文章展開（論理的な記述）がなされているものについて、特に高い得点をつけた。</p> <p>毎回の講義内容が「現場で環境問題を考える」視点からどのような示唆が得られるのか、さらに意識して受講されることを望みます。来年度以降に本科目の履修を検討している友人がいたら、この点を伝えてくださると助かります。</p>
<p>今後の改善点</p>	<p>受講者数が例年150名を超えるため、可能な限り一方通行の講義とならないよう、たとえば学生に質問を投げかけたり、レスポンスシートへのコメント記入後の返却をしたりと、双方向のコミュニケーションの機会確保に意識的に取り組みたい。</p>

(5) アクティブ・ラーニングの充実にに向けた提案

<p>ポイント提案</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・講義する立場の教員が、双方向型のコミュニケーションをとることを、デジタル的、アナログ的手法に関わらず意識を共有していくことが大切と考えます。 ・新聞記事の活用は、話題の拡大や質疑の機会を広げる素材である一方で、多くの学生はネット以外で記事に接する機会がほとんどなく、むしろ切抜きの方が学生にとって新鮮感をもたらす効果があったと感じます。
<p>参考になる資料</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・京都大学高等教育教授システム開発センター編(2002)：『大学授業研究の構想-過去から未来へ-』。2002年、東信堂。